

五 板の御蔭で毒が薬に

板を擔ぐのが強ち悪いとは申しませぬ。或る場合には是非とも擔がねばなりませぬが、又或る場合には、是非とも下さねばなりませぬ。是を間違つて下すべきに下さず、擔ぐべきに擔がなかつたなら、矢張り第三の惡擔板漢たるを免れぬ。

事物の眞相眞價を見究め、自他の實相實狀を知悉するには、殘なく板を下して虚心平氣に、之を看破らねば駄目である。増長すな、柄にもない慾を起してはならぬと云ふので「上みれば叶はぬことの多かりき、笠きて暮せ人の世の中」とか「上見ればあれほし(星)これほし星だらけ、下みて暮せほしかげもなし」と云つた式に、笠被つて下ばかり見てゐると、何時しか自分が最上等のやうな氣になつて仕舞ふ。それでは進歩向上と云ふことが出来ぬ。

下見れば吾に上こそすものはなし、笠とりて見よ空の高さよ
井の蛙では大海は知れぬ、まあ高い高い世の中であつたなあと、始めて驚くも遅かりし擔板漢。

四時花を開いて、何時も好い香を放つ、誠に不思議な大樹が、或る公園の眞中にありました。遠方から見れば誠に美しい。誰の人も知らず識らず引きつけられて、いつしか其の木の側へ寄る。寄れば其の木に不思議な毒があつて、皆その毒に中てられる。初めは何心なく、美しい花ぢや、綺麗な姿ぢやと、呆れて見て居る間に、毒がまはるのか、急に頭が痛くなつたり、腰や脊が痛みだしたり、甚だしいのは、卽座に死んで仕舞ふのさへある。何しろ怖い厄介な木だ。けれども何分、公園第一の立派な木であるから、呼びもせねば招きもせねど、いつしか大勢の人が集つて来て、少からず迷惑を蒙る。此有様を親しく見て居る公園の番人、諸人の難儀を救ふために、勇を鼓して彼

の木を伐り倒した。するとものゝ十日も経つや経たぬに、再び繁茂して、元の立派な樹木となる。その後、再三再四、伐れば伐るに従つて、後からく茂つて来る。番人も是には大に困つて、致方もなく其の儘月日を送つて居ると、そこへ一人の修行者がやつて来た。聞けばその根を掘り捨てなくては駄目だと云ふ。如何にも左様ぢや、尤な話ぢやとは思つたが、考へて見れば、これまで木を伐つたのさへ、随分と冒険な仕業、それが根を掘り出すとなれば、屹度死ぬるに定まつて居る、よし自分は公共のために死んでもよいとしても、あとに残つた老親や妻子が困る。一層の事、この公園を逃れて番人を止めたがよいと、直にその公園を逃げ出して仕舞つた。

何と不思議な樹ではあるまいか。馬鹿なそんな樹が何處にあると、お云ひでせうが。あるともくそこら中にある。一本や二本ではない、そんなじよそこらに林をなして居るのに、御氣付でないか。白や黄色のお金と云ふ樹を御存知であらう。地獄の沙汰も金次第と云ひ、金はなくてならぬと云ふが、なくてならぬ金のために、どんな結果を來すか。金が敵の世の中、金のために頭を痛め、身を苦しめ、恥までかきはせぬか。もう一つは蓆被、あれには大抵やられるらしい。何ッ俺こそはと、氣取つて行つた人も、歸りにはヒヨロリく、彼方へよつたり、此方へよつたり、八人連れの千鳥足、ヒヨツと違へば小間物店の開業式。何と酒と云ふ樹のアルコール中毒には、一溜もあるまい。處で今一つ「骨かくす皮には誰も迷ふらん、美人と云ふも皮のわざなリ」恚う悟つてしまへば何でもないが、悟つたやうでさて悟れぬ處に、色慾と云ふ不思議な毒が廻つて、惚れた腫れたで心中沙汰が持上つたり、赤衣着物で苦勞せねばならぬ事にもなる。咄這の擔板漢、貪欲色欲の板を擔いで居ては、毒が却つて薬に見え、苦が却つて樂に見えて、命を捨て身を亡ぼすぞ。

「情慾じやうよくと酒さけは甘あまき毒どく」

「酩酊めいていは一時じの發狂はつきやう」

とや、下おろせくその板いたを。